博士学位論文審査要旨

2009年2月18日

論文題目：　C.S.パース「プラグマティズム」の研究――関係と進化と立論のカテゴリー論的整序の試み――

学位申請者：　新　茂之

審査委員：

主　査：　文学研究科　教授　吉田　謙二

副　査：　文学研究科　教授　長澤　邦彦

副　査：　文学研究科　教授　工藤　和男

要　　旨：

本論は、C.S. パースが最初に提唱した、アメリカ独自の哲学思想である「プラグマティズム」の根幹について、説明仮説を形成する過程の論理的批判によって、カテゴリー論的分析に基く実際的経験主義として究明したものである。論考は、総合的推論としての「アブダクション」、実在の動態、関係的運動の論理的位相、自由と進化にある「立論」の組織的系統に関して順次加えられている。

パースがプラグマティズムの要諦をそこに見極めていた「アブダクション」は、アリストテレスの「アパゴーゲー」理解を踏まえて、大前提と結論の組み合わせから小前提を論理的に可能な事態として導出する推理とされているにもかかわらず、従来、一般に、これを形式的に後件肯定の謬論として無みしてきた。論者は、この推理に関するパースの理論の本質を、概念の外延を拡大することによって所与の対象を捉える推論、すなわち、「拡延」として同定し、アブダクションの包括的な形式化を果した。その作業は、認識の総合性を成立させる条件を明別するとともに「総合」の本来的意味を問い、カントのカテゴリー表の論理的誤謬を克服したパースの「拡延」分析のカテゴリー論的位相を、ブール、ド・モルガン、シュレーダー等、パースの同時代人による歴史的業績につながっている、「関係の論理学」にあるまったく新しい視座から明らかにした。

さらに、パースの三つのカテゴリーを基礎にして立てられる進化的宇宙論は、宇宙の進化的動態を洞察した哲学理論であるものの、偶然主義と連続主義と呼ばれる二つの観点を全体論的に論証しているために、これまでややもすれば形而上学的な議論として扱われがちであったものを、論者は、「立論」の組織系統という根本的連関から、実はパースのプラグマティズムが生成、消滅する宇宙的進化の動態的把握の理論であることを証示し、併せて、カテゴリーの連関をパースも果し終えなかった「存在図形」の確かな展開可能性の証明のうちに判然と示している。また、この論証によって、カテゴリーの論理的連関が、パースのプラグマティズムの理論にあって、拡延、演繹、帰納と区別される立論を整序し、関係、進化、立論の一般的構造として機能する実情に独自の照明を与えている。

よって、本論文は、博士（哲学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

学力確認結果の要旨

2009年2月18日

論 文 題 目： C.S.パース「プラグマティズム」の研究――関係と進化と立論のカテゴリー論的整序の試み――
学位申請者： 新　茂之
審 査 委 員：
主　査： 文学研究科　教授　吉田　謙二
副　査： 文学研究科　教授　長澤　邦彦
副　査： 文学研究科　教授　工藤　和男

要　　旨：

上記審査員3名は2009年2月18日（水）午後5時より約2時間30分にわたり、徳照館5階哲学科資料室において、学位申請者に対して、学力確認のための口頭試問を行った。

学位申請者は、審査委員からの質疑に対して的確かつ明晰な解答を行った。しかも、質疑を巡る論議は、学位申請論文の範囲を超えて広がる分析哲学の今日的展開に及び、論理学の哲学に関する学位申請者の透徹した認識と該博な学識が示された。加えて、関連する自然科学や数理科学についても詳細で正確な知識を有することが確認された。

また、先立って行った語学試験（英語およびドイツ語）では十分な学力が証明された。

したがって、本学位申請者の専門分野の学力ならびに語学力は十全なものであると判定する。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目： C. S. パース「プラグマティズム」の研究――関係と進化と立論のカテゴリー論的整序の試み――

氏　　名： 新　茂之

要　　旨：

本論の目的は、チャールズ・サンダース・パース（Charles Sanders Peirce, 1839-1914）の提唱する「プラグマティズム」（pragmatism）の要諦を明らかにするところにある。

パースによれば、「プラグマティズムに関する問いは、アブダクション（abduction）に関する問いである」（CP. 5: 197）から、「アブダクション」に関する問いこそが、パースのプラグマティズムの理論的特性を成しているとみなすことができる。それにもかかわらず、アブダクションの根幹を成す理論の実体について、これまで的確な考察が行なわれてきたとは言えない。そこで、第一章では、まず、従前の研究の問題点を指摘して、アブダクションの本性を分析的に明らかにする。パースに従えば、アブダクションは、「探究」（inquiry）を総合的な営みとして成立させるので、第二章では、探究におけるアブダクションの役割と、その認識的意義を摘出する。ところが、パースのプラグマティズムは、関係の論理学に基礎付けられているから、第三章の考察の照準は、パースが関係をどのように捉えているのかに定めなければならない。しかも、パースは、関係の論理学の形式的把握を通して、かれの「進化的宇宙論」（evolutionary cosmology）（CP. 6: 33）を築いている。そこで、最後に、パースの言う「進化」を究明し、アブダクション、関係の論理学、進化的宇宙について得られた理解を踏まえて、パースのプラグマティズムの基底を闡明する。

パースは、アブダクションを「説明的仮説を形成する過程」（CP. 5: 171）と捉え、「アブダクションは結果から原因への推理である」（CP. 2: 636）と主張している。だから、アブダクションは、或る事象がなぜ生起したのか、その理由を説明するために、結果から原因に遡る推論である。言い換えれば、アブダクションという推理は、Ｃであるという事実から、ＡであればＣであるという既存の知識に基づいて、Ａであるという仮説を立てる推論である。実際、パースは、「驚くべき事実Ｃが観察される。しかし、Ａが真であれば、Ｃは当然であろう。したがって、Ａが真であると考える理由がある。」（CP. 5: 189）という定式でアブダクションの過程を示している。これは、「Ｃである。ＡであればＣである。したがって、Ｃである。」という形式の推理であるから、アブダクションは、後件肯定の謬論である。

しかるに、アブダクションの研究は、後件肯定の謬論がアブダクションの唯一の定式であるという想定の下で行なわれてきた。アブダクションが後件肯定の謬論で示される場合、ＡとＣは含意で結び付けられる。とはいえ、どのようにしてそれらが含意で結び付けられるのかは、後件肯定の謬論だけではわからない。或る研究者は、一種の直観に依ってその結合が果たされると考えている。しかし、パースは、そのような経験的な直観的認識を否定しているから（CP. 5: 263）、アブダクションに経験的な推論の直観的機作が含まれているとは考えられない。また、ほかの研究者は、仮説への遡行とか、説明の選択とかといった観点からアブダクションの理解を試みているけれども、そうした仮説や説明の形成と選択については、パースの言説に即した解明を行なっていない。

したがって、従前の研究では、アブダクションの本質がいまだ見定められていないと言わねばならない。というのも、パースがアブダクションを「アパゴーゲー」の定式で示しているのにも

かかわらず、そのことの意義が正確に掴まれていないからである。アパゴーゲーは、アリストテレスに従えば、大前提から結論を演繹するためにどのような小前提を付け加えればよいのかを推理するものである。これを踏まえて、パースは、アパゴーゲーを、所与の大前提と結論の組み合わせから、論理的に可能な事態として小前提を導き出す推論とみなす。たとえば、道が濡れているので雨が降ったのではないかと考えるアブダクションは、道が濡れているという事実から、雨が降れば濡れるという理解に基づいて、道に雨が降ったと考える推理である。ここでは、濡れるという共通項に依拠して、「道」という概念に「降雨」という概念が結び付けられている。だから、パースは、アブダクションを、「特定の観点で二つの対象に強力な類似点があるのを発見し、それらは別の観点でも互いに類似している、と推理するときの推論」(CP. 2: 624) と捉えている。このように、アブダクションには、前提の命題に現れている概念を結合する過程が含まれているから、命題の内部構造に立ち入らない後件肯定の謬論とするだけでは、アブダクションの本質は掴めない。

しかも、アブダクションでは、或る概念を別の概念に結び付けるには、前者の概念が適用される範囲を拡大しなければならない。道が濡れているからと言って、それは、かならずしも降雨に因るものではない。別の原因も考えられる。それにもかかわらず、アブダクションでは、あたかも濡れる原因がすべて降雨であるかのように、推理が進んでいる。したがって、アブダクションは、或る概念の適用範囲、すなわち、外延を拡大して、その概念で所与の対象を捉える推論であり、その意味で、本論では、アブダクションを「拡延」と呼び、後件肯定の謬論とアパゴーゲーの定式を包括できるアブダクションの形式化を試みる。

ところで、パースの出発点は、カント (Immanuel Kant) の哲学に関する研究である。しかも、パースは、カントのカテゴリー表にある論理的誤謬を剔抉し、いっそう包括的なカテゴリーの導出を試みて、「第一性」(Firstness)、「第二性」(Secondness)、「第三性」(Thirdness) という三つの概念を提示している。そのとき、パースは、「総合的推理はいかにして可能であるのか」と問い、あらゆる認識からア・プリオリ性を排除し、総合的推理の可能性に関する制約を明らかにして、経験的認識を成り立たせているカテゴリーを示そうと試みた。そして、パースは、総合的推理の可能性を解明しなければならないことになった。１９０２年に、かれが拡延についてそれまで行なってきた分析を振り返って、「わたしは前人未踏の土地を踏査する探険者であった」(CP. 2: 102) と述べているように、たしかに、パースは、独自にカントのカテゴリー表の包括的導出をしようとして、認識の総合性を成立させる条件を問い、そこではじめて総合の本来的意味を担う推理として拡延が析出したのである。したがって、拡延に関する考察は、パースのプラグマティズムの究極的な中心的課題でなければならないのである。かくして、パースは、形式論理学の視点から、拡延を提示し、カテゴリーの導出を試みているから、パースのプラグマティズムの研究には、パースによる形式論理学理解の実情把握が欠かせない。パースは、ブール (George Boole)、ド・モルガン (Augustus De Morgan)、シュレーダー (Ernst Schröder) の論理学研究を踏まえて、関係の論理学 (the logic of relatives) の形式的体系化を試みており、関係の論理学に関する考察で明らかになる視座から、「第一性」、「第二性」、「第三性」というカテゴリーを導出している。そこで、本論では、パースの関係の論理学に考察の照準を定め、関係の論理学で取り扱われる関係のカテゴリー論的位相を明らかにする。

しかし、パースに従えば、「第一性」、「第二性」、「第三性」というカテゴリーを基礎に打ち立てられるべき哲学的理論は進化的宇宙論であるから、パースによるプラグマティズムの研究にさいしては、三つのカテゴリーに基づいて、宇宙の進化的動態を分析的に解明しなければならない。しかも、本論で証示するように、関係の論理学と進化的宇宙論に関するカテゴリー論的考察を踏まえると、拡延、演繹、帰納という推論の型、すなわち、立論 (argument) の組織系統に関するカテゴリー論的整序が可能になる。端的に言えば、パースが導出する「第一性」、「第二性」、「第

三性」という三つのカテゴリーの論理的連関は、関係、進化、立論の一般的構造として、パースのプラグマティズムの中で一貫して機能しているのである。それゆえに、パースは、カントのカテゴリー表の難点を克服し、いっそう一般的なカテゴリー表を得るために、関係の論理学についての形式的考察から三つのカテゴリーを抽出し、それに基づいて、進化的宇宙の動態的位相を分析的に明別した上で、「総合的推理はいかにして可能であるのか」という問いに対する論理学的視座として、立論の組織系統を闡明しているのである。したがって、パースのプラグマティズムに関する本論の論理学的考察を踏まえ、パースが探究の方法として科学の方法を重視していることを勘案すれば、パースのプラグマティズムは、進化的宇宙の中で生成し成長し消滅していく運動一般の論理的構造を、カテゴリーの論理的連関の下で捉える、カテゴリー論的分析主義に基づく実際的経験主義である、と結論付けられるのである。

註　パースの著作集 *Collected Papers of Charles Sanders Peirce*, England: Thoemmes Press, 1998 からの引用と参照に関しては、慣例に従い、本著作集を CP と略記し、その後ろに巻数と段落番号を付記して、本文中に挿入した。